

THE SHAKAI SHIMPO

社会新報

発行所 社会民主党全国連合機関紙宣伝局 週刊(水曜日発行)
〒104-0043 東京都中央区東3-19-17 マル千種本ビル5階 電話代案 03(3553)3787・03(401)3230
●定価185円 ●1カ月720円 ●送料168円

愛媛県連合版

発行所；社会民主党愛媛県連合
〒790-0066 松山市宮田町8-6
Tel：089-941-6065 fax：089-941-6079
発行責任者；逢坂節子 編集；中村嘉孝・源田竜也

☆地方独自の食と農業を守る

☆伊方3号機の廃炉をめざす

地域の食と農業の危機

地方による種子条例の制定を求める

1月26日、今治市総合福祉センターで、菅もりみ県議が主催する「食と地域を守るために何がで



主催者として挨拶する菅もりみ県議

治体の農業支援や農民の種子に対する権利が大きくなるようとしています。農業の権利が、農家や公的事業から民間企業に移ろうとする事態に対し、印鑰さんは「これまでタ

ネは農民のものとされてきたが、民間企業中心の農業へと大きく変わろうとしている。そうすることで、農民の種子が奪われることになる。これにより、業務米が増え、地域の食文化がなくなって

きるか？」をテーマに、「日本の種子(たね)を守る会」アドバイザーの印鑰智哉(いんやくともしや)さんに講演をしていただきました。

民間企業の農業参入強化をめざし、農業競争力強化支援法が成立しましたが、同時に主要農作物種子法も廃止され、自



市外からも参加者が集まった

しまう。」と、農業が民間企業に独占され、日本の健全な食のルールが破壊されようとしている現状を訴えました。



民間企業の食の独占に対し、警鐘を鳴らす印鑰さん

また、ゲノム編集食品が従来の食品と同じ取り扱いとされ、表示義務もなくなることについて「ゲノム編集食品は、特定の遺伝子を壊した食品であり、自然界と同じ現象である」とされているが、オフターゲットにより、壊すつもりのない遺伝子までも壊すこともある。このため、既存の機能を失い、健康リスクはつきまとう」と、消費者の健

康への悪影響についても明らかにしました。

日本の食文化が、民間企業や多国籍企業主流となり、農家が減少し、地域文化が破壊されつつある中、印鑰さんは「地域の食と安全を守るために、地方で種子条例を制定することで、農家の公的品種の自己増殖の権利を確保し、遺伝子組み換え食品やゲノム編集食品から食の安全を守るためのガイドラインを設けるべき



参加者は地域の食と農業を守る大切さを学んだ

である」と、種子を守るべく、地方が基盤を築いていく必要性を強く訴えました。

伊方原発3号機の相次ぐ事故

四国電力に事故の原因究明、廃炉を求める

定期検査中の伊方原発3号機で、48体ある制御棒の1本を誤って引き抜き、また燃料集合体の落下を示す信号を発したりするA区分の事故が相次いで起こりました。一方、広島高裁が運転を認めない仮処分の決定を再びしました。



四電の担当者に抗議文を渡す石川稔幹事長

明や一日も早い廃炉を求めました。四電は「トラブルがあったのは事実であり、お詫びしたい。原因究明をしていく」と応えました。



四電に事故原因の説明を求めた

23日、愛媛県平和運動センター、I女性会議愛媛県本部、社会民主党愛媛県連合の3団体は、四国電力に対し事故の徹底究

しかし25日、電源の一時喪失という事故が新たに発生し、28日、再度、3者合同で四国電力に対し、広島高裁の仮処分決定に対する異議申し立てを行わないことや廃炉を求め、抗議を行いました。四電は「一時的な停止はあったものの、電源喪失

後のバックアップ自体は正常に行われた。しかし、電源の設備故障については予期せぬことで、原因究明をしていく」と応じました。四電への申し入れ後、県に対しては、県民の不安を解消すべく四電に然るべき対応を求め、廃炉を行うよう、要請を行いました。県は「電源喪失については一時的なものでも、あつてはならず、ご心配をおかけした」



県に対しても、毅然とした対応を求めた

と陳謝しました。これまで、四国電力は幾度となく「事故は絶対起こさない」と明言し、

事故が発生した際にはその都度「二度と事故は起こさない。再発防止に全力を注ぐ」旨の発言を繰り返し、私たちは幾度となくその発言を聞かされてきました。しかし、残念ながら今回も事故が発生してしまいました。これ以上、事故が相次ぎ、危険な原発の再稼働を許すことはできません。私達は今後も、廃炉に向けた取り組みを続けます。

辺野古での壮絶な闘いと自然への想い

1月26日、松山市ギャラリー・リブ・アートで、鈴木公子さんによる「カヌーチーム『辺野古ブルー』



の闘い」の講演会が開催されました。鈴木さんは、自身が現地へ赴き、カヌーに乗って、工事が実際行われている様子

辺野古での壮絶な闘いを語る鈴木公子さんや住民が海上保安員と闘っている場面を紹介しました。工事が強引に進められていくことに対し、「72年に沖縄が返還されたと言えど、これまで航空機事故だけでも51件も発生し、人的被害は起き、さらに新しい基地が作られようとしている。これにより、5,800もの希少生物が絶滅の危機に瀕している」と、新基地建設に対する怒りを表明しました。そして、総面積の1.1%は工事が既に終わっていることに対し、「原状回復は無理と思われる。死んだ生物も沢山いて、戻ることもない」「これ以上、自然を破壊し、生物を死滅させないためにも、海を守るためにも、抗議行動を行っていく」との決意を披歴しました。